No. 38（平成７年２月28日）

市立美術報だより

発行　鹿児島市立美術館　〒892 鹿児島市城山町4－36　ＴＥＬ（0992）24－3400

館蔵品誌上ギャラリー ㊳

カミーユ・ピサロ
「ポントワーズの農園」
1882年
油彩・キャンバス
80.0×65.0cm

ピサロが画家志望の夢を雑貨商の父に認めさせ、生まれ故郷のカリブの島セント・トマスからパリへ旅立ったのは1855年、25歳の時である。

はじめ、コローに傾倒した彼は1870年代には10歳年下のモネに傾倒し、この作品を描く頃には４歳年下のドガに魅せられていた。

モネ等多くの仲間が、当時新進画家の登龍門であったサロンの心証を害することを怖れて出品を控える中にあって唯一人、印象派展に出品し続けたピサロ、偏狭なといっていいほど人づきあいの悪かったモネ、セザンヌ、ゴーギャンの友人であり得たピサロ、そこから彼の謙虚で誠実で信念を貫きとおす人柄を想い描くことができる。

ドガが「モデルとする人物の姿勢や日常の環境を通じてその人格のより完全なイメージ」を創出することに全力を注いだように、ピサロは、対象とする風景を自然と人間のいとなみの長い時間をかけた一つの融和の姿、風土を描くことに全力を注いでおり、画面はそのまま画家ピサロの人格の表現のようにも思われる。

描かれているのは、パリの北西、セーヌの支流オワーズ川に沿う街ポントワーズの農村部、ル・シューの丘の斜面である。ピサロは1866年から1883年までポントワーズに住んでいた。